

言語をデザインする、あるいはエスペラントという問題解決

小田 昇平*

Dezajni lingvon, aŭ problemsolvado kiel Esperanto

ODA Ŝohei*

Resumo : Estas multaj lingvoj en la mondo, kaj ankaŭ estas multaj konstruitaj lingvoj. En la multaj konstruitaj lingvoj, Esperanto estas la plej konata lingvo en la mondo, sed ne multaj homoj scias pri Esperanto. Esperanto inventita de Lazaro Ludoviko Zamenhof (1859-1917) estas problemsolvada lingvo kiam oniaj lingvoj estas neuzebla, nome Esperanto estas dezajnata kiel punta lingvo. En tiu ĉi artikolo mi ekzamenas la artefaritan lingvon, Esperanton, kiel la lingvo estas dezajnata. En la artikolo, mi ekzamenas sonoj, vortaj, kaj teoria baso de Esperanto per *Fundamento de Esperanto* (1905) de Zamenhof, kun *La ricerca della lingua perfetta nella cultura europea* (1993) de Umberto Eco (1932-2016), kaj *Esperanto La lingvo hereza* (2007) de TANAKA Kacuhiko (1934-). Mi konkludas, ke 1) Esperanto estas dezajnatatan lingvon kiun ĉiuj devas fari la samajn penojn senescepte, kaj ke 2) fakte estas fluaj esperantistoj kaj samtempe ne fluaj esperantistoj estas, sed ĉiuj fartas bone danke al Esperanto, simile arabaj parolantoj en « Dar al-islam » en *Overcoming Tourism / Voyage international* (1994) de Hakim Bey (1945-2022).

Ŝlosvortoj : Esperanto, Design, Lazaro Ludoviko Zamenhof, Umberto Eco, Hakim Bey

1. はじめに

本論文は、数多ある創作された言語の試みのなかでも、おそらくはもっとも市民権を得ており、人びとに知られているエスペラントを主題とする。多言語の流通にたいする問題解決として提出されたこのエスペラントなる言語が、いかによくデザインされているか。じっさいにエスペラントに入門して検討するある種の参与観察である本論文において、エスペラントのデザインのカギは、「みなが有利不利なく同様に学ぶこと」と、「それを可能にする工夫」とにあることが示される。

2. 共通言語という夢

ジャン=ジャック・アノー(Jean-Jacques Annaud, 1943-) 監督作品『薔薇の名前 *The Name of the Rose*』(1986)は、イタリアの中世美学と記号学とを専門とするウンベルト・エーコ(Umberto Eco, 1932-2016)による同名小説『薔薇の名前 *Il nome della rosa*』(1980)を原作とする。中世の修道院を舞台とするある種のミステリである本作品は、エーコの研究成果をふんだんに盛り込んだテキストが元となっており、それ自体興味深いものではあるが、ここで注目したいのは本映画

作品で使われる言語である。

中世の修道院といえば、当世のインテリたちが集まる今でいうところの大学をはじめとする高等教育機関であり、研究所である。当時はもちろん、修道院ではラテン語が用いられていた。しかしながら、学術言語がラテン語であるということそれじたいは、世界中（といってもここではもちろんヨーロッパ、せいぜいがその周辺）から集まったインテリたちにとってはたいした問題ではなかったことだろう。彼らはラテン語はもちろん、今でいう古典ギリシャ語や、ひとによってはヘブライ語やアラビア語などを解したであろうし、その母語である当時のフランス語、イタリア語、スペイン語、ドイツ語や英語といった言語は、お互いの言語的な距離もわりあいには遠くないから、インテリたちにとってはさほどむづかしいものではなかったはずだ。

映画作品『薔薇の名前』ではこうした事情はどのように表現されたのだろうか。本作品において主として用いられる言語は英語である。そしてヨーロッパ各地を出身地とする俳優たちは、それぞれの母語の影響を受けた英語で演じている。

* 教養科 Divido de liberaj artoj

「〇〇語なまりの英語」を各々が話している¹、というわけだ。この解決方法はじつにさえたものである。じっさい中世の修道院においてもおそらく、同じことがラテン語を舞台として生じただろうからだ。「〇〇語なまりのラテン語」を各々が話し、研究や解釈、そして宗教的生活をつとめあげていたはずだ。

中世におけるラテン語の役割を、現代においては英語が果たしている。中世の修道院を舞台としているにもかかわらず本映画作品は、こうした事情を明瞭に反映している。中世におけるラテン語の役割、それは知的階級における、という限定こそつくものの、世界中(もちろんヨーロッパとその周辺)どこであっても通用する言語であった。だから自分の言語が通用しないところであったとしても、高い知的水準の相手であればラテン語を使えばよかった。現在では、(こちらは文字通り)世界中どこであっても通用する言語として、英語がその立場を担うようになった。映画作品『薔薇の名前』にて展開される通り、「〇〇語なまりのラテン語」ならぬ「〇〇語なまりの英語」が、世界を席卷している。この事実についての価値判断は差し控えよう。ともかくも肝心なことは、ヨーロッパ地域にある島国における地域言語であったはずの英語が、国際的な補助言語どころか第一選択の言語となっていることである。

こうした状況が英語にもたらす悪影響として、言語がほんらい持ち合わせていたはずの文化とのつながりを欠いてしまうことがあげられる。たとえばフランスの映画を研究するのであれば、フランス語ができなくてはならないし、ロシア文学を研究するならロシア語が、イスラームを研究するならアラビア語が、それぞれ必須であるはずだし、翻ってそのために各々の言語を学ぶための燃料を供給してくれる。しかし、英語にはそれが無い。いや、正確には、あれほど豊かな文化や藝術を持ち合わせているにもかかわらず、国際的な言語となった、あるいはなってしまうとたん、言語と文化との切り離すことができなかつたはずのつながりが希薄となった。結果英語を学ぶ動機づけは、資格であるとか、就職に有利だとか、そうした表層的なものとなつてしまった。アメリカのバンド、The Doors は Light My Fire とさげんだけれど、これでは火もつきようがない。「Les infortunes de l'anglais」ともいふべきこの状況にある英語の運命は、ひょっとしたら別の言語、たとえばフランス語、が担っていたのかもしれないがしかし、既存の言語にたいし、このような過酷で熾烈な運命を与えてよいのだろうか。既存の言語は、その言語をつかうひとたちにとって、良くも悪くも影響を与えるのだから。

既存の言語、とぼくは書いた。まだみぬ言語、知らない言語ではなくて、存在「しなかつた」言語。つまり、つくられた言語がある。だからその言語には、そもそも文化や藝術が存在しない。にもかかわらず、そしてだからこそ、その言語は国際補助言語として屹立している、あるいはすくなくとも、それを意図してつくられた。現在のリトアニアにうまれたユダヤ系のあるひとがそれを夢見て、稀有なことにその夢を実現させたからだ。そのひとの名前は、ラザロ・ルドヴィコ・ザメンホフ(Lazaro Ludoviko Zamenhof, 1859-1917)、別名エスペラント博士。眼科医であったザメンホフは、世界語や国際語と呼称される「エスペラント Esperanto」をデザインし、公にした。じつのところこうした着想はザメンホフの独創ではない。人工語や改良言語といった発想は多くなされ、じっさいに数多の言語が公にされた^[1]。しかしながら現在においてもなお通用するそうした言語はエスペラント以外には見当たらない。本論文の主人公は、そんな類稀なる言語、「エスペラント」である。

3. デザイン

本論文のもうひとつの主人公は、「デザイン design」ということばである。デザインということばの内実を、なるべくニュートラルなかたちで表現するならば、それは「問題解決」というところに落ち着くだろう。ぼくたちはしばしば、デザインということばから、グラフィック・デザインやファッション・デザインないしはファッション・デザイナー、あるいはプロダクト・デザイナーといった、なにかしらフィジカルに眼でみてとれるような「かたち」を扱うきらびやかな仕事を思い浮かべる。しかしながらこうした状況は実のところデザインの一面をしかふまえていない。先述のデザインやデザイナーたちが目論むのは、問題解決である。たとえばよりよく耳目をひきつけたい。たとえばよりよいかたちで装いたい。たとえばよりよく使えるモノをつくりたい。こうした目標のためデザインは、素材、資金、アイデアといった、さまざまな制約の中から、よりよいモノゴトをめざす。フランスの文化人類学者、クロード・レヴィ=ストロース(Claude Lévi-Strauss, 1908-2009)がいうところの「ブリコロール bricoleur」とリンクするデザインは、限られた資源、さまざまな制約から、すこしでもいい状況をつくりだすためのものだ。

そうしたデザインと密接に関与するジャンルに、「建築 architecture」がある。建築は、ジョルジョ・ヴァザーリ(Giorgio Vasari, 1511-1574)の著作のタイトルに『画家・彫刻

¹ 本映画作品中の言語についてのこの議論は、論者が大学院生であったある日、上倉庸敬先生が講義内外において本作『薔薇の名前』をいっしょに鑑賞して下さったときに

ご指摘されたことである。ご本人はきっと、ぼくそんなこと言ったつけ、とおっしゃるでしょうけれど、ここに記して御礼を申し上げたい。

家・建築家列伝 *Le vite delle più eccellenti pittori, scultori, e architettori*] (1550)とあるとおり、彫刻や絵画とならんで「美術 fine art」の一部をなしているけれども、たとえば住居のように居住空間の設定という実用性をもっている。ここから自ずと建築は、藝術の側面と工学の側面とを併せもつこととなる。デザインもまた同様に、藝術と工学とのふたつの顔をもつ。

それゆえにデザインするひと、たとえば建築家たちは、自分たちの仕事に際してさまざまな制約を背負ってデザインする。その民族の文化を強調するとか、逆に民族性を消臭する作品をつくるか、そうしたときにデザイナーたちは、選択をせまられる。どの素材を使うか、どのような工法をもちいるか。どんなキャッチフレーズで売り出すか、どのようなタイポグラフィを使うか。あるいは、どのような言語をもちいるか。その作品群の中立性を表現するために、エスペラントをもちいたものたちがいた[2]。あるいはエスペラントは、その教義を表現するために宗教において用いられた[3]。さらには国家など必要ないというその思想を明瞭に表現するためにアナキストたちは、国とむすびつかない言語であるエスペラントに期待を寄せた[4]。

ぼくたちのような、いわゆる職業デザイナーでないものたちにとって、デザインはどのように関与するだろうか。たとえば今着ている服について考えてみるとよいかも。それはきっと、どこかの誰かがデザインしたものであり、(すこしくらいは)自身のイメージ構築のために身に纏っているはずだ[5]。あるいはなんらかの機器に付属するスイッチやボタン、誤操作に至ったことは一度や二度ではないはずだ[6]。こうしたぼくたちの日常生活におけるモノゴトには、デザインが浸透している。すでにしてデザインは、アーティストやデザイナーだけのものではなく、ぼくたち市井の人間にも強く影響を及ぼし、ぼくたちもまた自分たちの身の回りを、あるいは自分たち自身をデザインしている。その結果のひとつが、先述したエスペラントの選択である。

本論は、「エスペラントのデザイン」について考察するものである。言語にたいしてデザインということばを用いることは、相当に異例であることはいまでもない。しかしながらこのエスペラントなる言語は、明らかにザメンホフと仲間たちとによって「デザインされた言語」であるという出自をもつ。そのデザインに触れることが、本論文の目的である。そのために本論文は、ザメンホフによる『エスペラントの基礎 *Fundamento de Esperanto*] (1905)、そのなかでもとりわけ、「Gramatiko 文法」を中心とし、エスペラントがどのようにデザインされているのかを確認する。それというのもこの『エスペラントの基礎』こそは、「わたくしたちの『基礎 *Fundamento*』のうち、もっとも些末な変更であつてもその

変更を恣意的に行う権利はいかなるひとにもいかなる社会にも与えられるべきではない」[7]とまでいわれる、エスペラントにおける憲法に擬えられるものであるからだ。

4. 『エスペラントの基礎』

ザメンホフが1905年に公にした『エスペラントの基礎』は、Antaŭparolo、Gramatiko、Elzercaro、Universala Vortaro、すなわちそれぞれ、「前文」、「文法」、「練習」、「普遍的辞書」の部分から構成されている。本書は基本的にはエスペラントにて記述されているが、「文法」の項目、「練習」の語彙説明にあたる箇所、「普遍的辞書」は、フランス語、英語、ドイツ語、ロシア語、ポーランド語にて記されている。すなわちこれからエスペラントを学ぼうとするものは、前述のフランス語、英語、ドイツ語、ロシア語、ポーランド語のいずれかから入門することとなる。したがってまず、エスペラントにおける最初のデザインは、この入門のための言語選択であり、その言語選択には無理がない。それでもなお問題は山積みである。文字をどうするか。音をどうするか。語の機能をいかにするか。つまり、文法の問題である。したがっておのずと、ぼくたちの探究は『エスペラントの基礎』Gramatikoの部、つまり「文法」へと向かうこととなる。

4. 1. エスペラントの文字と音

まずは文字に目を向けよう。『エスペラントの基礎』「文法」冒頭に、エスペラントのアルファベットが記されている。エスペラントのアルファベットは、ローマアルファベットを基礎としてつくられている。したがって先にふれた言語にかんしていうならば、キリル文字を採用しているロシア語話者がやや不利な状況となる。くわえてこの箇所はエスペラントの音韻論をも示すこととなるので、フランス語版、英語版、ドイツ語版、ロシア語版をそれぞれみていこう。エスペラントにおいて用いられるアルファベットは、以下の通りである。以下、各アルファベットにたいして、その音の表記と、『エスペラントの基礎』「文法」から、順にフランス語、英語、ドイツ語、ロシア語の記述をそえていく[8]。

A) エスペラントのアルファベット

Aa Bb Cc Ĉĉ Dd Ee Ff Gg Ĝĝ Hh Ĥĥ Ii Jj Ĵĵ Kk Ll Mm Nn Oo Pp Rr Ss Ŝŝ Tt Uu Ŭŭ Vv Zz

Aa アー /a/

à、「[ast] にでてくるような a、a、a。

Bb ボー /b/

b、「[be] にでてくるような b、b、b。

Cc ツォー /ts/

tsar の ts、「wits」にでてくるような ts、c ないし z、ц。
 Ĉĉ チョー /tʃ/
 tchèque の tch、「church」にでてくるような ch、tsch、ч。
 Dd ドー /d/
 d、「do」にでてくるような d、d、д。
 Ee エー /e/
 é、「make」にでてくるような a、e、э。
 Ff フォー /f/
 f、「fly」にでてくるような f、f、ф。
 Gg ゴー /g/
 gant のように強い g、「gun」にでてくるような g、g、г。
 Ĝĝ チョー /dʒ/
 adjutant の dj、「join」にでてくるような j、dsch、дж。
 Hh ホー /h/
 軽く息を吐く h、「half」にでてくるような h、h、(r ないし x)。
 Ĥĥ ホー /x/
 強く息を吐く h、強く息を吐く h あるいはスコットランド語「loch」における「ch」、ch、x。
 Ii イー /i/
 i、「marine」にでてくるような i、i、и。
 Jj ヨー /j/
 yeux の y、「yoke」にでてくるような y、j、й。
 Ĵĵ ジョー /ʒ/
 j、「azure」にでてくるような z、sh ないし j、ж。
 Kk コー /k/
 k、「key」にでてくるような k、k、к。
 Ll ロー /l/
 l、「line」にでてくるような l、l、л。
 Mm モー /m/
 m、「make」にでてくるような m、m、м。
 Nn ノー /n/
 n、「now」にでてくるような n、n、н。
 Oo オー /o/
 ô、「not」にでてくるような o、o、о。
 Pp ポー /p/
 p、「pair」にでてくるような p、p、п。
 Rr ロー /r/
 r、「rare」にでてくるような r、r、р。
 Ss ソー /s/
 ss ないしは ç、「see」にでてくるような s、ss、с。
 Śś ショー /ʃ/
 chat の ch、「show」にでてくるような sh、sch、ш。
 Tt トー /t/
 t、「tea」にでてくるような t、t、т。

Uu ウー /u/
 ou、「bull」にでてくるような u、u、у。
 Ũũ ウォー /w/
 (ドイツ語の「laut」における) 短い ou、(二重母音で用いられる)「mount」にでてくるような u、短い u、y (краткое「短い y」)。
 Vv ヴォー /v/
 v、「very」にでてくるような v、w、в。
 Zz ゴー /z/
 z、「zeal」にでてくるような z、「lesen」にでてくるような s、з。

以上にくわえて、表記にまつわる注釈がつけられている。フランス語版は「注 ĉ、ĝ、ĥ、j、ŝ、ũ の文字をもたないタイポグラフィであれば、ch、gh、hh、jh、su、u によって置きかえてもよい」、英語版は「注 ダイアクリティカルサイン (、) が印刷できない場合には、h の文字を「^」の記号および「~」の記号のかわりに用いてもよいし、省略してもよい」、ドイツ語版は「注 ĝ は英語における gentleman の g のように発音する。j はフランス語における journal の j のように発音する。ũ は glauben における (ひとつの母音だけが発音された) 短い u のように発音する。タイポグラフィに欠けている場合には、ĉ、ĝ、ĥ、j、ŝ、ũ のかわりに ch、gh、hh、jh、su、u を用いる」、ロシア語版は「注 1 h の文字は、ドイツ語、ラテン語、その他の言語における h のように発音する。(つねに母音のあとで用いる) ũ の文字は、ドイツ語の kaufen とか、ラテン語の laudo における短い u のように発音する。ロシア語以外にほかのどのような言語のアルファベットも知らない人については、最初のあいだ、h をロシア語の x のように、ũ をロシア語における y のように発音してもよい」「注 2 ĉ、ĝ、ĥ、j、ŝ、ũ の文字をもたないタイポグラフィは、最初に ch、gh、hh、jh、su、u を用いてもよい」とある。

以上のように、各々の言語がもつ特性に目配せをした記述がみられる。たとえば英語がもつ音の複雑さ、あるいは記述する文字とそれが表現する音との対応のなさへの考慮として、細やかに例があげられている。各言語に存在しない音の処理については、別の言語を借りてきて音を説明したり、ロシア語版のように代替案を示して、初学者ないしは母語以外の言語に触れていないものにとっても負担が少なくなるようデザインされている。

エスペラントの音韻論はしたがって、ヨーロッパ言語がもととなつてはいるものの、かならずしもその言語を使うひとが有利となるわけではない、しかしながら可能な限り手をさしのべる、という立場をとっている。キリル文字を用いるロ

シア話話者が不利なのか、とおもいきや、たとえばフランス話話者にとっては /h/ は使わない音だし、おなじローマのアルファベットを用いている言語話者にとっても、その母語での音とエスペラントでの音との齟齬をすり合わせる必要がある、つまり、どの言語を話す者にとっても、エスペラントを使えるようになるには一から学ぶ必要がある。極端にいつてしまえば、イタリア話話者がスペイン語を理解するようには理解できないようにデザインされているのがエスペラントである（とはいえ現実には、複数のヨーロッパ言語を解するものであれば、書かれたエスペラントの内容についてはある程度想像できる）。このエスペラントの立場は、音にかぎらずことばの作り方、語の選定にも一貫するものである。みんな同様に、有利不利なく同じ言語を学んで使おう、という問題解決すなわちデザインが、エスペラントに一貫している。

4. 2. エスペラントの文法

本論にて言及すべき、B) 話法の部、それから C) 一般的な規則を注意深くみていきたい。

エスペラントはその名が体を表すように、ラテン語由来であることが予測されるが、そのイメージとは裏腹に、ラテン語圏や特定の母語集団に有利とはかならずしもいえない、中立性を担保した言語である。「1. 不定冠詞はない。あらゆる性、数、格にたいするたったひとつの定冠詞、*la* がある」[9] ことからしてすでに、ラテン語に近いことばとはその種類を異にするということがわかるだろう。では、その性、数、格などはどのように示すのだろうか。以下は、事例の通りをよくするため、英語版から訳出ないしは説明していく[10]。議論の都合上、順番を前後させている箇所もある。

B) 話法の部

2. 実詞はその語根に *-o* をつけて形成される。複数形にするには、単数形に *-j* の文字をつけなければならない。格はふたつ、主格と目的格（対格）とがある。語根に *-o* がつけられていれば主格で、目的格は *-o* のうしろに *-n* をつける。その他の格は、前置詞によって形成される。すなわち、所有格（属格）は英語の *of* にあたる *de* で、与格は *to* にあたる *al* で、助格（奪格）は *with* にあたる *kun*、あるいは意味に応じて他の前置詞が用いられる。例：

語根 <i>patr</i>	父	<i>father</i>
<i>la patr'o</i>	父は	<i>the father</i>
<i>la patr'o'n</i>	父を	<i>the father</i> (目的格)
<i>de la patr'o</i>	父の	<i>of the father</i>
<i>al la patr'o</i>	父へ	<i>to the father</i>

<i>kun la patr'o</i>	父と	<i>with the father</i>
<i>la patr'o'j</i>	父（複数）は	<i>the fathers</i>
<i>la patr'o'j'n</i>	父（複数）を	<i>the fathers</i> (目的格)
<i>por la patr'o'j</i>	父（複数）のために	<i>for the fathers</i>

以上のように、名詞の処理は非常に明確である。さまざまな格変化への言及があるのは、ロシア語などスラヴ系言語話者への目配せであろうと考えられる。くわえて代名詞、形容詞、副詞などについてみていこう。

5. 代名詞は、*mi* (I)、*vi* (thou, you)、*li* (he)、*ŝi* (she)、*ĝi* (it)、*si* (self)、*ni* (we)、*ili* (they)、*oni* (one, people、フランス語の *on*) である。所有格の代名詞は、求められる人称に形容詞接尾辞をつけることで形成される。代名詞の語形変化は、実詞の語形変化と同一である。たとえば、*mi* (I)、*mi'n* (me 目的格)、*mi'a* (my, mine) となる。

3. 形容詞は語根に *-a* をつけて形成される。数と格は名詞におけるそれと同じである。比較級は接頭辞 *pli* (英語の *more*) によって、最上級は *plej* (*most*) によって形成される。「*than*」にあたる語は *ol* によって表現される。たとえば、*pli blanka ol neĝo* (whiter than snow) となる。

7. 副詞は語根に *-e* をつけて形成される。比較の度合いは形容詞におけるそれと同じである。たとえば、*mi'a frat'o kant'as pli bon'e ol mi* (my brother sings better than I) となる。

4. 基数詞はさまざまな格においてもかたちをかえない。それぞれ、*unu* (1)、*du* (2)、*tri* (3)、*kvar* (4)、*kvin* (5)、*ses* (6)、*sep* (7)、*ok* (8)、*naŭ* (9)、*dek* (10)、*cent* (100)、*mil* (1000) となる。十の位と百の位とは、数詞と単純に連結して形成される。たとえば *533* は、*kvin'cent tri'dek tri* となる。序数は、基数詞に形容詞の *-a* をつけて形成される。たとえば、*unu'a* (1st)、*du'a* (2nd)、などとなる。倍数詞（たとえば「*threefold*」や「*fourfold*」など）は、*obl* をつける。たとえば、*tri'obl'a* (threefold)。分数には、*du'on'o* (a half) とか、*kvar'on'o* (a quarter) のように、*on* をつける。集合数詞は *kvar'op'e* (four together) のように、*op* をつける。配分の接頭辞は *po*、たとえば *po kvin* (five a piece) である。副詞は *-e* をとる。たとえば、*unu'e* (firstly) など。

8. すべての前置詞は主格支配である。

ここまででざっくりと、エスペラントのことばの作り方がわかるだろう。すなわち、

語根 + xxx

のかたちが基本となる。xxx に-o を代入すればその語根を元にした名詞、-a なら形容詞、-e なら副詞がそれぞれつくられることになる。たとえば、ĝojo ということばは、語根が ĝoj である。これに-o、-a、-e をそえればそれぞれの名詞、形容詞、副詞となるため、

ĝojo よろこび (名詞)
 ĝoja うれしい (形容詞)
 ĝoje うれしそうに (副詞)

となるわけだ[11]。そしてエスペラントの動詞は、以下のよう
 に作られる。

6. 動詞は数や人称によってはかたちを変えない。たとえば、mi far'as (I do), la part'o far'as (the father does), ili far'as (they do)となる。

動詞のかたち

- a) 現在時制は-as でおわる。たとえば、mi far'as (I do) となる。
- b) 過去時制は-is でおわる。たとえば、li far'is (he did) となる。
- c) 未来時制は-os でおわる。たとえば、ili far'os (they will do)となる。
- d) 仮定法は-us でおわる。たとえば、ŝi far'us (she may do)となる。
- e) 命令法は-u でおわる。たとえば、ni far'u (let us go) となる。
- e) 不定法は-i でおわる。たとえば、far'i (to do)となる。

この国際言語にはふたつのかたちの分詞がある。曲用できる分詞すなわち形容詞的分詞と、曲用できない分詞すなわち副詞的分詞とのふたつである。

- f) 現在分詞の能動態は-ant でおわる。たとえば far'ant'a (he who is doing), far'ant'e (doing)となる。
- g) 過去分詞の能動態は-int でおわる。たとえば far'int'a (he who has done), far'int'e (having done)となる。
- g) 未来分詞の能動態は-ont でおわる。たとえば far'ont'a (he who will do), far'ont'e (about to do)となる。

h) 現在分詞の受動態は-at でおわる。たとえば far'at'e (being done)となる。

h) 過去分詞の受動態は-it でおわる。たとえば far'it'a (that which has been done), far'it'e (having been done) となる。

i) 未来分詞の受動態は-ot でおわる。たとえば far'ot'a (that which will be done), far'ot'e (about to be done)となる。

受動態のかたちはすべて、動詞 est (to be)のそれぞれのかたちと、求められるそれぞれの動詞の分詞、受動態とを組み合わせることからなる。用いられる前置詞は、de (by)である。たとえば、ŝi est'as am'at'a de ĉiu'j (she is loved by every one)となる。

以上のように組み立てられるから、動詞のつくりは、現在：-as、過去：-is、未来：-os、仮定法：-us、命令法：-u、不定法：-i となる。くわえて能動的分詞と受動的分詞とがそれぞれ現在、過去、未来にあわせて、-ant-、-int-、-ont-、-at-、-it-、-ot-となる。今現在日本でもよく知られているヨーロッパ言語のような活用はないし、名詞の性数によるかたちの変化もない。新しく言語に触れるものにたいして一番の障害となるのがこうした語の変化である。たとえば英語においてなら、多くの過去形動詞をつくる-(e)d や複数形名詞をつくる-(e)s といった規則があるにもかかわらず、この規則をやすやすと踏み越える事例が多く存在する。こうした言語の性質はその入門者の気を萎えさせるに十分なものだけれど、エスペラントにかぎってはこの心配はいらない。それというのもエスペラントは、以上のようにすべて規則に適応するようデザインされているからだ。

C) 一般的な規則

その他、9. から 16. までの内容を概観しよう。まず、「9. あらゆる語は書かれたとおり正確に読まれることになる。黙字はない」「10. アクセントは最後から 2 番目の音節におかれる」とある通り、英語のような複雑怪奇な音もちいることはない。いづれの文字もひとつの音のみを担い、アクセントの位置も例外はない。

11. 複合語は語根の単純な接合によって形成される(主要な語が最後におかれる)。これは単語として記述されるが、初等教育での著作においては、小さな線「|」によって分離される。文法的接尾辞は独立した語として考える。たとえば、vapor'ŝip'o (steamboat)は、語根 vapor (steam)と ŝip (a boat)から構成され、実詞の接尾辞-o をそなえる。

12. 節のうちに否定がひとつあった場合、ふたつめの否定は認められない。

13. 「どこ」(ここでは方向を指している)という問いにこたえる句において、語は目的格の接尾辞をとる。たとえば、*kie'n vi ir'as?* (where are you going?), *dom'o'n* (home)、*London'o'n* (to London)などである。

14. はよく用いられる前置詞が担いづらい意味内容を補う前置詞「je」、15. は外来語の処理、16. は詩作における音韻処理について述べられている。とくに 15. 16. において、エスペラントが全世界的にその版図をひろげることと、その際に文化や藝術がカギとなることを意識していることが注目しに値する。「国語」とする国がなく、その言語による文化や藝術がないからこそ、それに対応可能であることを示すことは、言語デザインにとって欠かすべからざる事項であった。

以上、わずか 16 項目にてエスペラント文法は把握が可能となる。くわえて幾分か、ことばのつくり方について言及しておこう。エスペラントの語は既存の言語からの援用、ブリコラージュによってつくられている。たとえば英語の語をエスペラント化して用いるこのデザインにより、まったくのゼロ地点から学ぶ労をさけている。しかしこれは諸刃の剣でもあった。男性形/女性形の対について、今度は『ヨーロッパ文化における完全言語の探究 *La ricerca della lingua perfetta nella cultura europea*』(1993)をたずさえたエーコに、ふたたび登場願おう。

〔語尾-o によって名詞がつくれ、しばしば男性をさすこと〕それにたいして女性形は、語尾-o の前に接尾辞-in を挿入することで「有標化」される。たとえば、「父/母」は *patr'o/patr'in'o*、「王/女王」は *reg'o/reg'in'o*、「男/女」は *vir'o/vir'in'o* となる。[12]

エスペラントはしばしば膠着語に分類される。その性質を活かして、ひとつのことばから、さまざまなことばをつくっていくことができる。ここではとくに、男性形/女性形の両方を覚えるという労の省略が示されている。しかしながら田中が指摘する通り[13]、ここについては既存の言語、既習の言語の知識が障害となりうる。たとえば「母」。*mère*、*mother*、*Mutter*、*мать* などといったことばの知識をエスペラントで使うことはできず、*patro* の女性形、*patrino* が要求される。田中はエスペラント造語法のむつかしさについて、「学校 *lernejo*」を例にとって指摘している[14]。読んだりする分にはわかるのだけれど、発信する分には困難がある。

同様のむつかしさは、接頭辞 *mal-*にもある[15]。ラテン語にて否定の意味でもちいられる接頭辞 *mal-*、エスペラントではこの接頭辞を「悪い」の意味をとりさって、もっぱら「反対・逆」を示すためにもちいる。たとえば *granda/malgranda*、*juna/maljuna*、それぞれ大きな/小さな、若い/老いた、がそれだ。しかし *dekstra/maldekstra*、つまり右/左(=右の反対、右の逆)というのはエスペラントの語感がなければ理解がむつかしい。これはあのディストピア小説を思い起こさせる。じっさい田中によればジョージ・オーウェル(*Georg Orwell, 1903-1950*)によるニュースピークは、以下のとおり茶化されたエスペラントである[16]。

同様に「暗い」(*dark*)は *unlight* によって、*bad* は *ungood* によって不要になる。〔中略〕文法の不規則性を除く方法としては *think* の過去形は *-ed* をつけて *thought* とし、これによって *thought* という、不規則形を除く。同様に *man* の複数形は *mans* (*men* ではなく)、*ox* の複数形は (*oxen* ではなく) *oxes* とする。[17]

ニュースピークは明らかにエスペラントを範として考案されたものだ。ニュースピークが茶化することができるこうした「言語のクセ」「ひっかけり」があるのは、その言語が特有のものとなっていることを示す証左である。そしてこうした「クセ」や「ひっかけり」をうみだすものこそ、言語デザインの成果に他ならない。

5. おわりに

本論は以上の通り、エスペラントのデザインについて、じっさいに論者が『エスペラントの基礎』に入門してとらえる、ある種の参与観察である。

先に言及した通り、エスペラントには、使うひとがみな、有利不利なく同じ言語を学んで使う、という問題解決がなされている。つまり英語話者、あるいはすくなくとも英語と距離に近い言語の話者が有利とされる現在の世界情勢のあり方とは一線を画す発想である。そしてこの発想はまた、社会デザインでもある。『のりこえるべき観光/意図的な旅 *Overcoming Tourism / Voyage intennationnel*』(1994)においてハキム・ベイ(*Hakim Bey, 1945-2022*)は、ダール・アル・イスラーム *دار الاسلام*、すなわちイスラーム世界(イスラーム法のおよぶ範囲)における文化的、言語的統一性のおかげで、ムスリムたちははるか遠くへと旅ができたのだと指摘する。これはイスラームという共通の基盤がなす文化と言語との統一がなせるわざであるが、かならずしもみなアラビア語をじょうずに話すわけではなかった[18]。つまり、みなが一様に努力して身につけたということに他ならない。

エスペラントはそこからさらに歩みを進める。宗教や文化とは関係なく、しかも各々の母語を残したうえでなお、たとえみんながみんなじょうずにお話できなくても世界中どこでだってことばが通用する、エスペラントがめざしたのはそんな世界であった。そのための言語デザインは、ダール・アル・イスラームのような社会デザインでもあったはずだ。そしてだからこそ、アナキストたちはエスペラントに期待したのだ。

さあ幕はあがって久しい、Ni jam estas sur scenejo.

参考文献

[1] 人工語としては Volapük、Novial など、改良言語としては BASIC (British American Scientific International Commercial) という改良英語や、Latino sine flexione という改良ラテン語、IDO というエスペラントの改良案などがあげられる。Umberto Eco, *La ricerca della lingua perfetta nella cultura europea*, Roma-Bari, Laterza, 1993, pp. 341-362、ウンベルト・エーコ『完全言語の探究』、上村忠男・廣石正和訳、平凡社ライブラリー、2011年(、もとは平凡社より「叢書ヨーロッパ」の一冊として1995年)、461-488頁、伊東三郎『エスペラントの父 ザメンホフ』、岩波新書、1950年、たとえば66-71頁や78-80頁など、田中克彦『エスペラント異端の言語』、岩波新書、2007年、たとえば18-43頁などを参照。

[2] 藤田治彦『現代デザイン論』、京都造形芸術大学、1999年、137-138頁、147-153頁を参照、。

[3] 田中克彦『エスペラント』、152-157頁。

[4] 同書、157-166頁。

[5] 小田昇平「転移をうみだすアクセサリ ジンメル、ラカン、バルト、メゾン・マルタン・マルジェラのアクセサリをめぐって」『vanitas 007』、アダチプレス、2021年、126-142頁。

[6] Donald A. Norman, *The Design of Everyday Things*, New York, Basic Books, 2002, pp. 1-33.

[7] Lazaro Ludoviko Zamenhof, *Fundamento de Esperanto naŭa eldono kun Enkondukoj, notoj kaj lingvaj rimarkoj de D-ro A. Albault*, Marmande, Esperantaj Francaj Eldonoj, 1963 (Lazaro Ludoviko Zamenhof, *Fundamento de Esperanto*, Paris, Hachette, 1905), pp. 43-44. 強調は原著。なお、本論におけるエスペラント、フランス語、英語、ドイツ語、ロシア語、イタリア語の翻訳はすべて論者によるが、既存の翻訳があり、参照できる場合には、参考にさせていただいた。記して御礼を申し上げたい。以降、外国語文献については原著でのページ数を p. xx と表記する。日本語訳を参照した場合には、p. xx, xx 頁と併記する。

[8] *Ibid.*, pp. 51-73. 以下、4. 1. にある引用と記述とは、

『エスペラントの基礎』「文法」フランス語版、英語版、ドイツ語版、ロシア語版、それぞれからのものである。本来ならばポーランド語の翻訳をそえるべきであろうけれど、論者はポーランド語を解さないため、本論には不備がある、ということをお含みおきいただきたい。ただし、ポーランド語訳がなくとも、「エスペラントのデザイン」にふれることはできる。『エスペラントの基礎』原文の明らかな誤記については、引用時に修正して訳出した。用いた版においても誤記が指摘されている。

[9] *Ibid.*, p. 57.

[10] *Ibid.*, pp. 57-61. 以下、4. 2. にある16までの番号がついている引用と記述とは、『エスペラントの基礎』「文法」の英語版からのものである。

[11] 阪直『20のポイントで学ぶ国際語エスペラント入門(第4版第2刷)』、一般財団法人日本エスペラント協会、1989年初版、2017年、4頁。

[12] Umberto Eco, *La ricerca della lingua perfetta*, p. 353, 477頁。引用冒頭の括弧は引用者による補足。エーコによる原文は語根と語尾との区切りを「-」で表記しているが、本論では「|」にて統一した。

[13] 田中克彦『エスペラント』、53-57頁。

[14] 同書、94-97頁。

[15] 同書、58-60頁。

[16] 同書、107-118頁。

[17] 同書、110-111頁。

[18] Hakim Bey, *Overcoming Tourism / Voyage intentionnel*, Carcassonne, Musée Lilim, 1994, p. 14.